



温州ミカンの浮き皮果は気象状況の変化などにより近年多発傾向にあり、商品率の低下、腐敗果の発生につながることから生産現場で大きな問題となっています。

その対策の一つとして植物成長調整剤であるシベリンとプロヒドロジャスモンの混合散布による浮き皮軽減技術（GP処理）が開発されていますが、散布する条件によっては、着色の遅れや斑点状に緑色が残ること（緑斑）が知られています。そこで、浮き皮果やGP処理による着色障害が木のどの部分（上部・外周部、内部）の果実で発生するかについて調査しました。

き皮果の発生は樹体上部および外周部で多く見られました。また、GP処理を行うと浮き皮果の発生は軽減されますが、着色遅れや緑斑が発生し、これらは

温州ミカン浮き皮果

GP処理で発生軽減 樹体表層中心に散布を

樹体内部で多く見られました。なお、この時確認された緑斑は、商品果率に影響のない軽程度のもので大部分でした。この結果から、浮き皮果軽減を目的

GP処理と着果部位の違いによる浮き皮果、果皮色と緑斑の発生

処理区	着果部位	浮き皮果発生率(%)	果皮色 ^z 発生率(%)	緑斑	
				発生率(%)	指数 ^y
GP処理	上部	0.0	0.21	61.0	27.0
	外周部	2.0	0.17	62.0	27.8
	内部	0.0	0.14	79.0	40.0
無散布	上部	14.0	0.31	—	—
	外周部	12.5	0.31	—	—
	内部	2.2	0.27	—	—

^z値が大きいほど果皮の赤みが強く、着色が進んでいることを示す。無(0)、軽(1)、中(2)、甚(3)の4段階で、 $(\sum(\text{発生程度別果数} \times \text{発生程度})) / (\sum \text{調査果数}) \times 100$ で算出

としてGP処理を行う場合、樹体表層（上部・外周部）を中心に散布することが望ましいと考えられます。
（長崎県農林技術開発センター 果樹・茶研究部門 カンキツ研究室 主任研究員・石本慶一郎）